

ずいそう

富岡製糸場の世界遺産に思う

今井 幹夫



2014年5月、カタールのドーハで開催されたユネスコの世界遺産委員会において『富岡製糸場と絹産業遺産群』は世界文化遺産に記載された。特に富岡製糸場は産業としての製糸技術をフランスから早い時期に日本へ完全に移転し、わが国の製糸技術の革新を果たしたという顕著で普遍的な価値が認められたのである。事実、製糸器械等の機器類並びに首長ポール・ブリュナをはじめとする設計士・生糸検査人技師・女性の繰糸指導者（女性）及び医師等はすべて明治政府が雇い入れたフランス人であった。

当時、国内ではあまり類例のない木骨煉瓦造の大規模建造物群は、その後、三井家に払い下げられ、さらに原合名会社、片倉工業㈱の経営に引き継がれたが、創建当初の建造物群をほぼ完全に残しながら生糸一筋の生産活動が続けられた。この間、生糸の量産化、効率化を図るため繰糸機及び関連機械は常に最新式な機械を導入した。つまり経営主体が替わっても箱物は旧来のままで、中身は新陳代謝の繰り返しの経営方針が貫かれたのである。

しかし、1980年代になると、海外からの安価な絹製品の大量輸入や良質な化学繊維の普及等によって、わが国の輸出産業の首座を担ってきた製糸業は壊滅的な打撃を受け国内の製糸場は閉鎖され取り壊されていった。1987年3月、富岡製糸場もついに機能を停止し、通算115年間の生産活動が終息した。

しかし所有者の片倉工業㈱は当工場の歴史の重さを深く受け止め、「売らない・貸さない・壊さない」という社是のもとに完全な維持管理体制を続けた。ここで官営模範器械製糸場としての役割を以てスタートした富岡製糸場はすべての工程の設備を損なうことなく、停止時の姿のままで保存されたのである。

2003年8月、当時の小寺弘之知事は富岡製糸場を世界遺産にする研究プロジェクトを発表し、世界遺産準備室を新設した。この趣旨に賛同した片倉工業㈱は2005年に建物一切を富岡市に寄贈したのである。富岡市では世界遺産部を新設すると共に富岡製糸場総合研究センターを立ち上げて新たな調査研究をスタートさせた。

このような経過を振り返る中で筆者は深い因縁を感じる。1972年10月、富岡市は富岡製糸場の創業百年を記念して操業中の工場を借りて「近代産業発祥100

年祭」を実施し、創業以来の貴重な資料を集めて展覧会を開催した。当時、わが国はバブル経済の頂点にあり、また富岡製糸場は創業以来からの最高の生産量に達していた。まさに意気軒高の時であった。当時筆者は製糸場に近い小学校で教師であったので、児童を引率して創業時からの各種資料の展覧会を見て回った。この新事業が成功裏に終わったことから翌年には発展事業として製糸場に関する資料収集並びに資料集の編さん計画が策定され、その編さん担当として筆者が命を受けて教育委員会事務局に配属となった。根本資料集の編さんには4か年かかったが、資料総数700点、上下巻併せて2000ページ余の『富岡製糸場誌』が刊行された。今回の世界文化遺産を議する政府提出の推薦書には『富岡製糸場誌』が多く活用されたとのことである。この編さん事業が終わると、『富岡市史』の編さんが始まり筆者が編さん室長の命を受け、さらに膨大な資料を調査することができた。こうして全7巻に亘る『富岡市史』編さん事業を終了させ、筆者は小学校長として教育委員会事務局から転出した。以後、4校の小中学校の校長を歴任し1995年3月に定年退職した。同じ頃、富岡美術博物館兼福沢一郎記念美術館の開館が迫っていたため初代館長として着任し特に歴史資料の調査収蔵に努めた。

2007年4月、富岡製糸場の世界遺産登録を目指して世界遺産部が新設され、さらに富岡製糸場総合研究センターが置かれると筆者が初代の所長に任命されて現在に至っている。

因みに富岡市が近代産業発祥百年祭を実施した1972年はユネスコにおいて世界遺産条約が制定された年であり、その翌年度から『富岡製糸場誌』の編纂が始まったわけである。そして世界遺産登録を目指した世界遺産部が新設され、その組織内に富岡製糸場総合研究センターが設置されるに及び、さらなる資料の収集整理やその情報発信の役目を仰せつけられた。振り返ってみると、富岡製糸場の変化の節目々々に関わることで、尚且つ調査研究を深めることができた。この道程は筆者の人生の半分を超えていたのである。自分自身よく続いたものと改めて深く思うところである。